

NPO ふるさと回帰支援センター—2015年の動向

NPO 法人 100 万人のふるさと回帰・循環運動推進・支援センター

理事長 見城 美枝子

・ ふるさと回帰支援センター出展自治体の増加

相談員配置自治体：5 県→29 県1 市

・・・地方創生における人口減少対策としての位置づけ（即効性を求めて）

2015 年度出展自治体一覧（東京情報センター：2016 年 1 月 1 日現在）

専属相談員と相談窓口設置

従前より設置：福島県、山梨県、広島県、

新規設置：秋田県、山形県、富山県、福井県、静岡県、静岡市、和歌山県、山口県、高知県、宮崎県

専属相談員のみ配置

従前より配置：青森県、岡山県

新規配置：岩手県、茨城県、神奈川県、栃木県、群馬県、長野県、岐阜県、三重県、香川県、徳島県、愛媛県、大分県、熊本県、長崎県、鹿児島県

展示パネルブースのみ設置

従前より展示：新潟県、新潟県長岡市（山の暮らし再生機構）、茨城県県北地域、長野県飯山市、長野県駒ヶ根市、石川県、鳥取県、島根県

新規展示：北海道土幌町、北海道函館市、愛知県、長野県大町市、富山県朝日町、滋賀県東近江市

2015年度 NPOふるさと回帰支援センター(東京)
ブース出展等自治体(県)

	展示パネルブース設置	5 県
	専属相談員のみ配置	17 県
	専属相談員と相談窓口設置	12 県

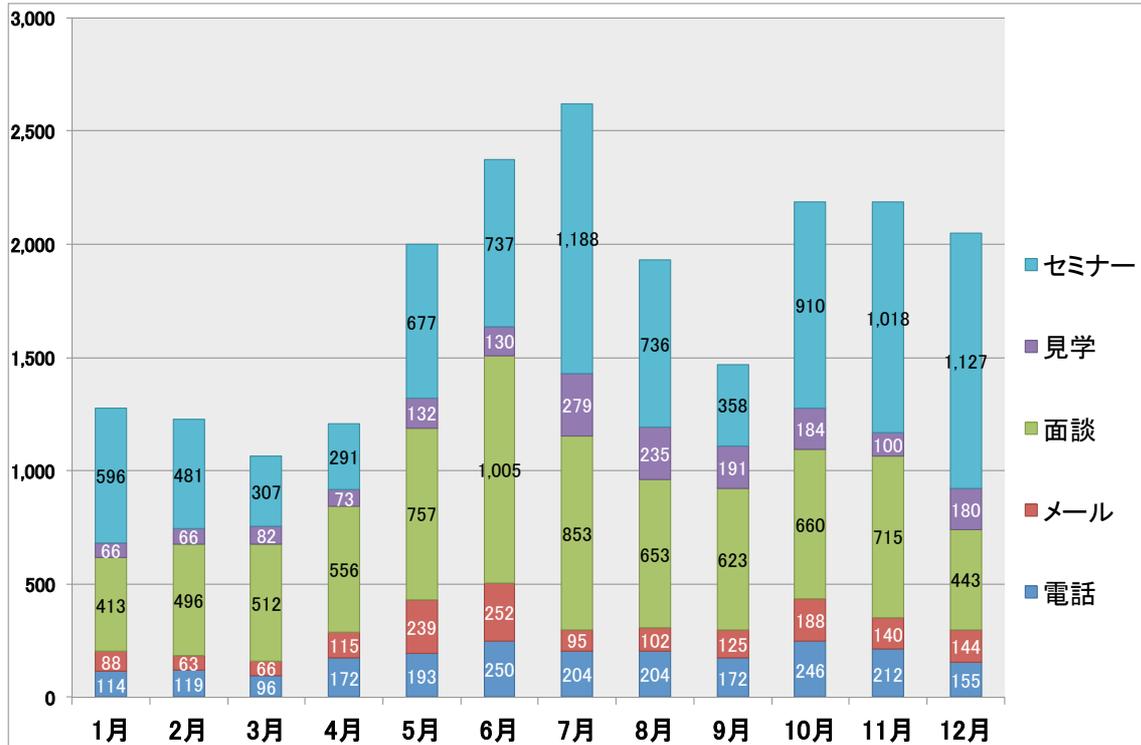


写真 ふるさと回帰支援センター移住相談員

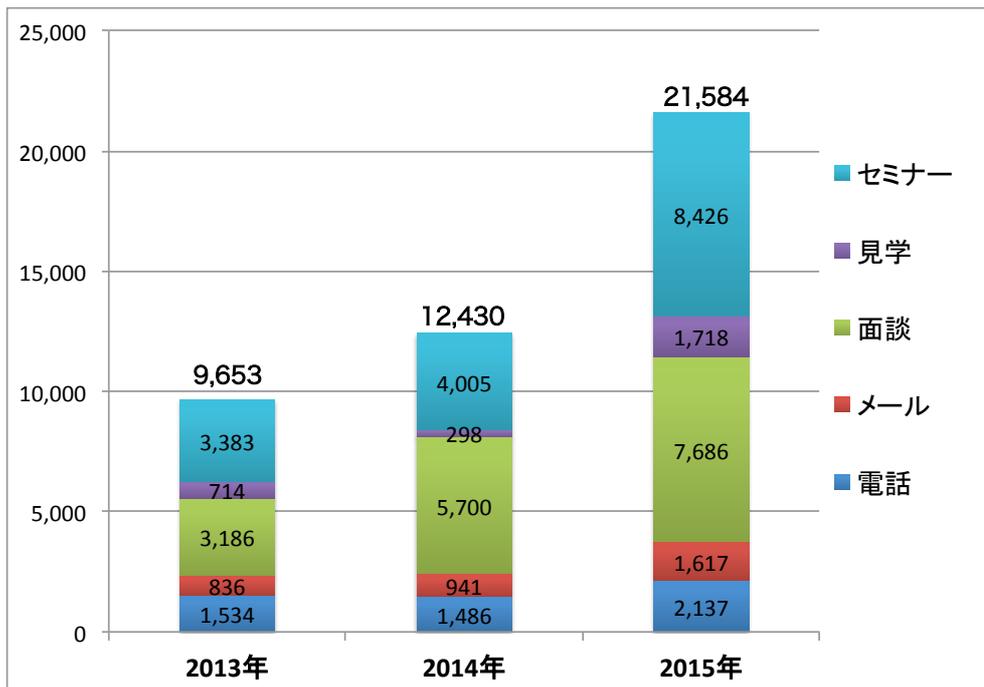
相談件数の増加の増加

- 相談員配置自治体の増加による相乗効果
- 移住相談会・セミナー開催数の倍増・・・136回 → 302回
 - ◇ 裾野が広がったことによる「漠然とした」相談の増加・・・個別相談よりも地域情報を希望。情報収集の「見学」も増加。

相談件数の1年間推移 (2015年/暦年)

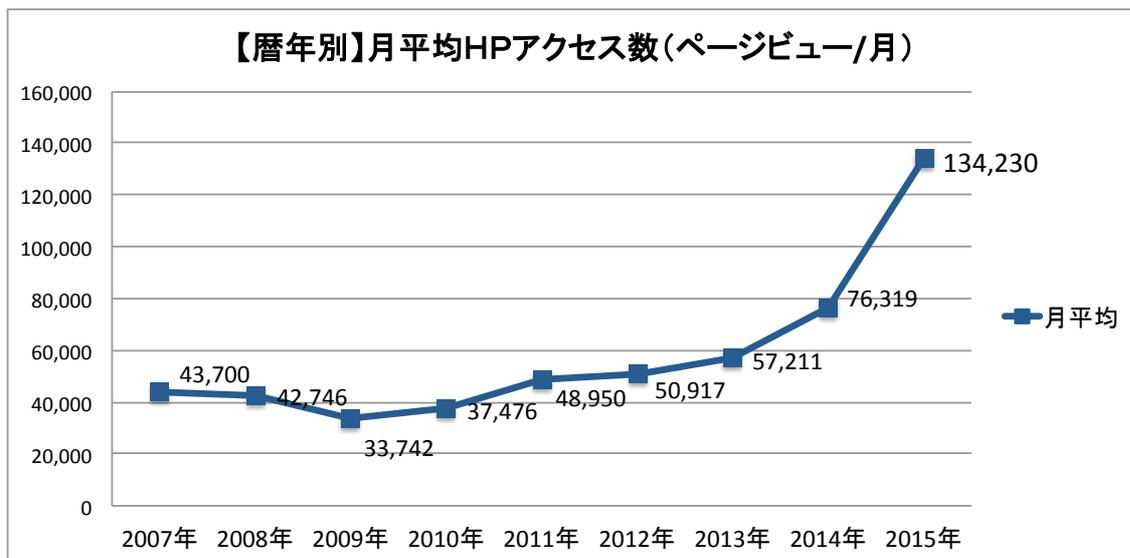


相談件数の3年間推移 (2013年~2015年/暦年)



・ 地方移住への関心の高まり

- ふるさと回帰支援センターWEB サイトアクセス数が前年の 1.76 倍に



	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
月平均	43,700	42,746	33,742	37,476	48,950	50,917	57,211	76,319	134,230
年間計	524,405	512,950	371,157	449,710	587,395	611,007	686,531	915,832	1,610,756

- ふるさと回帰フェア2015・・・来場者が過去最大の14,000人に
 ◇ 出展自治体も42都道府県300自治体に



- メディア取材 (2015年4月～2016年1月)
 ◇ 新聞：59件、雑誌：15件、TV：57件、ラジオ：7件、WEB：2件

・ 自治体の動き

- 山梨県北杜市・・・2014年移住希望地ランキング1位の山梨県内一番人気
 - ◇ これまで人気の高かった「中高年」から「子育て」世帯をターゲットに
 - ◆ 市役所内に移住定住相談窓口の新設、相談員を配置
 - ◆ 子育て世代向けマイホーム補助金を新設



写真 単独自治体で 100 名を超える参加者を集める北杜市の移住セミナー



・ 新たな民間の動き

- 全国に広がる「〇〇移住計画」・・・「京都移住計画」から全国へ
 - ◇ UI ターンの若者が自分たちで取り組み
 - ◇ 身の丈にあった暮らし+居場所づくり
- 「まちおこし」から「まちつかい」・・・既存ストックの有効活用
 - ◇ リノベーションスクール、空き家改修プロジェクト等が全国で開催

・ 必要な支援策と規制緩和

- 「移住体験住宅」の旅業法の適応除外
- ニーズの高い就業情報・・・回帰支援センター内でハローワークの地方就労情報を
- 流動化しない地方の空き家を移住希望のニーズが高い賃貸住宅に・・・所有者の負担の少ないサブリースの仕組みと地域でのコーディネート仕組みづくり
- 多業・複業の支援・・・農山村型ワークシェアリング（ベーシックインカム的な収入源の確保が前提)

・ 今後注目のキーワード

- 「継業」：移住者が地方で必要とされるローカルビジネスの後継者となる動き
- 「孫ターン」：跡継ぎがない祖父母のところに都会に住む 20～40 代の孫が移住する動き

NPO法人ふるさと回帰支援センター ～あなたの田舎暮らしをお手伝いします～

① 日本全国の田舎暮らしの情報がセンターに集約！

下記地域のPRブースを中心に豊富な情報を発信しています。(取扱地域:北海道～九州)

|5階・東日本| 北海道上士幌町、北海道函館市、◎青森県、◎秋田県、◎岩手県、◎山形県、◎福島県、◎茨城県、公財グリーンふるさと振興機構(茨城県)、◎栃木県、◎群馬県、◎神奈川県、◎山梨県、◎長野県、長野県飯山市、長野県駒ヶ根市、長野県大町市、新潟県、山の暮らし再生機構(新潟県長岡市)、◎富山県、富山県朝日町、石川県、◎福井県、◎静岡県、◎静岡市、◎岐阜県、愛知県、アットホーム株式会社

|6階・西日本| ◎三重県、滋賀県東近江市、◎和歌山県、鳥取県、島根県、◎岡山県、◎広島県、◎山口県、◎香川県、◎徳島県、◎愛媛県、◎高知県、◎長崎県、◎大分県、◎熊本県、◎宮崎県、◎鹿児島県、生活科学運営
その他約950自治体の田舎暮らしに関連する資料を常設しています。

※◎がついている自治体には専属の相談員がいます。

② 個別のご相談にも随時対応！

田舎暮らし実現に向けて地域の情報提供と、様々なご相談に相談員が個別で対応します。

漠然とした思いをお話し頂くことが田舎暮らしへの第1歩につながります！

ご利用・ご相談は無料で承っておりますので、まずはお気軽にご相談ください。

③ 地域ごとのセミナーも開催！

地域の最新情報や、先輩移住者の話を気軽に聞ける「田舎暮らしセミナー」も開催しております。

田舎暮らしや、地方での生活に憧れているけれど、地域を決めかねている方は、セミナーに参加され、自治体等による個別相談を利用することで、より具体的なイメージを掴んで頂けます。

ふるさと回帰支援センターの活用方法の紹介



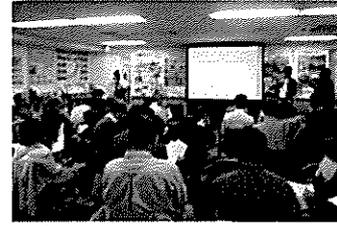
センターに来訪

全国の田舎暮らしを応援している地域の資料や書籍を常設で展示。
自由に情報収集ができます。



相談員に相談

生活スタイル・気候・地域の情報を聞き、移住後のライフスタイルを固めていきます。
移住相談員が個別で対応します。



各地域のセミナーや 現地体験ツアーに参加

センターで開催する各自治体主催のセミナーや移住体験ツアー、現地のイベントなどに参加して、地域の情報を集めましょう。

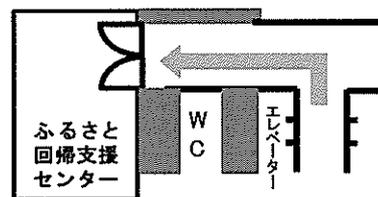
ふるさと暮らしセミナー開催一覧(予定)

開催日	曜日	開催時間	団体名	セミナータイトル	場所
1月23日	土	13:00~15:00	山形県	やまがたハッピーライフカフェVol.9	5階
1月23日	土	17:00~19:30	茨城県	いばらき暮らしセミナー ~霞ヶ浦周辺 水郷のまち~	5階
1月23日	土	12:00~15:30	宮崎県日南市	宮崎県日南市 太陽の下で暮らそう! 良質に出会う君のためのセミナー	6階
1月23日	土	17:00~20:45	京都府	“京都に暮らす”&“京都に帰る相談会”	6階
1月24日	日	12:00~15:00	三重県	ええとこやんか三重 U・Iターン就職セミナー	6階
1月24日	日	16:30~19:30	宮崎県	宮崎県綾町あったか暮らしセミナー	6階
1月24日	日	11:30~14:30	長野県	楽園信州移住セミナー	5階
1月24日	日	16:30~18:30	神奈川県	ちょこっと田舎な 神奈川で暮らす。	5階
1月29日	金	18:30~20:30	茨城県	いばらき暮らしセミナー ~通勤圏内 二地域居住のまち~	5階
1月29日	金	19:00~21:00	広島県	HIROBIRO.ひろしま in トーキョー 大人女子編	6階
1月30日	土	1部 13:00~ 2部 16:00~	静岡県	ふじのくにに住みかえるセミナー「魅力的な栖(すみか)」	5階
1月30日	土	12:30~15:30	鹿児島県	かごしま移住・交流セミナー	6階
1月30日	土	17:30~20:30	大分県	おおいた暮らし塾~IT企業就職説明会~	6階
1月30日	土	11:30~17:30	岡山県岡山市	「おかやま生活」移住相談会	3階 グリーンルーム
1月31日	日	13:00~15:00	静岡県	ふじのくにに住みかえるセミナー「首都圏通勤で暮らす」	5階
1月31日	日	13:00~16:00	愛媛県	えひめ「愛」ランド座談会 ~あなたに合う島、愛媛にあります~	6階
2月3日	水	18:30~20:00	テンプスタッフ	40代からの「地方で働く」相談会	5階
2月5日	金	18:00~20:00	長野県松川町	松川町 移住・就農・交流セミナー(地域おこし協力隊セミナー)	5階
2月5日	金	17:00~20:30	宮崎県	宮崎県小林市移住セミナー	6階
2月6日	土	13:30~15:30	福島県	いわき・相双ふるさと暮らしセミナー ~地方移住のちょっと気になる?を少しでも解消~	5階
2月6日	土	17:00~19:00	富山県	とやま暮らし相談会 in 東京	5階
2月6日	土	13:00~15:30	熊本県天草市	「日本の宝島」天草で暮らそう 田舎暮らしセミナー	6階
2月6日	土	17:00~20:45	京都府	京都に暮らす&京都に帰る相談会	6階
2月7日	日	12:00~14:30	栃木県	とちぎ暮らしセミナー&相談会vol.4 《宇都宮市・栃木市・佐野市・高根沢町 編》	5階
2月7日	日	17:30~19:30	富山県朝日町	富山県朝日町ふるさと暮らしセミナー	5階
2月7日	日	11:00~14:00	三重県	ええとこやんか三重 移住相談会	6階
2月13日	土	12:30~15:30	山梨県	第9回やまなし暮らしセミナー「北杜市」	5階
2月13日	土	17:00~19:30	茨城県	いばらき暮らしセミナー ~茨城特色 いろいろのまち~	5階
2月13日	土	12:30~15:30	鹿児島県	かごしま移住・交流セミナー	6階
2月13日	土	17:30~20:00	長野県飯島町	いいじま町delいい暮らし♪	6階

開催時間、開催内容に関してご不明な点はふるさと回帰支援センタースタッフまでお問合わせ下さい。



5階・6階ともに、エレベーターホールを左へ!



認定NPO法人 ふるさと回帰支援センター

〒100-0006

東京都千代田区有楽町2-10-1 東京交通会館5・6階

火曜~日曜 10:00~18:00 (定休日 月・祝日)

TEL 03-6273-4401 FAX 03-6273-4404

E-mail ginza@furusatokaiki.net

100万人のふるさととは、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。



100
万人の

2015
冬
Winter

100万人のふるさとと回帰循環運動情報誌

ふるさと

「町」の視点から見た
ふるさとと回帰運動の現状

ふるさとと鼎談

特別寄稿 田園回帰1%戦略～地元にと仕事を取り戻す

●TOPICS しまねU・Iターンフェア 2015 in東京開催

表紙写真：もりおか雪あかり(盛岡市)

contents

3

「連載 ふるさと回帰運動への想い 第15回」
「待っています、山形で。」 吉村美栄子 山形県知事

4

ふるさと
県談
「町」の視点から見た
ふるさと回帰運動の現状

竹中 貢（北海道士幌町 町長）
笹原靖直（富山県朝日町 町長）
見城美枝子（認定NPO法人ふるさと回帰支援センター 理事長）

10

ふるさと相談員 わがふるさとへの思い ③
秋田県、栃木県、熊本県、高知県

特別寄稿 田園回帰1%戦略〜地元の人と仕事を取り戻す 藤山浩

16 WELCOME TO ふるさと暮らし情報センター Vol.27

- わかやま移住・就職フェアレポート
- 第2回 山梨県・長野県・静岡県 3県合同移住相談会&セミナー
- 長野県・新潟県・富山県・石川県 ④北陸新幹線開業！ 4県合同移住フェア

18 連載10 移住者が語る四季の暮らし
福島県、徳島県

大阪ふるさと暮らし情報センター

大阪センターレポート〜活躍する移住相談員さん
現地で活躍する移住相談員さん

TOPICS

22 しまねU・īターニア 2015 in 東京 開催

23 編集後記／会員募集のお知らせ



撮影者：齊藤健祐

「ここ（山形県）には、大都市とは違うもうひとつの日本がある。人間と自然の豊かな調和を損なわない形で発展の可能性をもつ将来の日本像である」。かつて、本県を訪れた元駐日米国大使のライシャワー博士は、本県をこのように評されました。

東京から新幹線でわずか約2時間30分の山形県には、「さくらんぼ」「フランス」といった果物、トップブランド米「つや姫」、「山形牛」、「芋煮」など、美味しい食べ物が沢山あり、全市町村に温泉も湧いております。出羽三山や本山慈恩寺など、精神性の豊かな文化や、地域における伝統行事などが今でも受け継がれております。三世代同居率や女性就業率の高さは全国トップクラスで、地域や家庭がお互いに支え合い助け合って暮らす県民性が自慢です。これほど心豊かに暮らせる県は他にないと自負しております。

山形に移住された方を見ますと、このような環境で子育てしたいと移住された若い家族、温泉を楽しみながら悠々自適に第二の人生を過ごされている御夫婦、山形の伝統工芸やマタギ等、地域の文化を担っている方など、いきいきと、自分

らしい暮らしを実現されております。もともと多くの方々に、山形暮らしを始めてもらいたいと願っております。

そのため本県におきましては、移住専門誌など様々な媒体も活用し、山形への移住についての情報の発信や個々の具体的なニーズに応じた相談対応を図ると

「暮らす」「仕事」「体験」など分野別に移住に関する様々な支援情報、既に山形に移住された方々の体験談を発信しているほか、動画掲載も進めております。

また、県や市町村の移住相談窓口に加え、本年4月には、本県への移住交流を促すための首都圏における拠点とし

ます。

さらに、農業や本県唯一の離島である飛島の暮らしなどを体験できる短期滞在プログラムや、それぞれの市町村でお試し移住体験住宅なども準備しており、更なる充実を図ってまいります。

移住に向けての準備にあたっては、市町村の空き家バンク等による住まいの紹介、移住者の身近な相談に対応する移住サポーターの配置など、引き続き受け入れ環境の整備を県と全市町村挙げて、しっかりと進めてまいります。

山形県は、何でも揃っていて、質的に豊かな人間らしい暮らしができる県です。あなたに合った、あなたの人生が豊かになる山形暮らしが見つかるはずですよ。ぜひ山形においでください。お待ちしております、山形で。

連載
第15回

ふるさと回帰運動への想い



待っています、
山形で。

山形県知事
吉村 美栄子

1951年生まれ。
お茶の水女子大学卒業、リクルート入社。
2000年に山形県内で行政書士開業。
この間、山形県総合政策審議会委員をはじめ、
山形県教育委員会委員などを歴任。
2009年から現職。
現在2期目。

もに、実際に山形暮らしを体験していた
だくこと、そして、住まいや仕事探
しの移住に向けた具体的な準備の段階
で、各々の段階に合わせ取組みを進
めて
おります。

て、『やまがたハッピーライフ情報セン
ター』を開設いたしました。センター
は、移住コンシェルジュ等が移住や就
職に関する相談に対応するとともに、
山形の魅力や暮らしぶりを移住者から直接お
話しを聞くことができる「やまがたハッ
ッピーライフカフェ」を毎月開催して

県の移住・交流ホームページ「すま
い
る山形暮らし情報館」では、「住む」



きてけろくん
(山形県おもてなし課長)

「町」の>>>視点<<<から見た ふるさと回帰運動の現状

東京一極集中への警鐘と地方移住

ふるさと回帰支援センターにブース出展していただいている多くの自治体の中で、「町」単位で参加していただいているところがたった2つだけある。北海道上士幌町と富山県朝日町だ。2つの「町」は行政単位としては小さいながらも、独自の施策を打ち出して頑張っている。今回は、その2つの町の町長さんに集まっていただき、当センターの見城理事長と鼎談をしていただいた。



コーディネーター
見城 美枝子

認定NPO法人ふるさと回帰支援センター 理事長



笹原 靖直

富山県朝日町 町長



竹中 貢

北海道上士幌町 町長

小さな町にも、
そこにはしかないものがある

見城 今日はいよいよ、ふるさと回帰支援センターへお越しくださいましてありがとうございます。県単位とか市単位でみなさん会員としてブースを出していただいているのですが、お二方は町としてブースを設けてくださっています。積極的な参加ですが、それぞれ自己紹介をしていただけますか。

竹中 北海道全体で見ると真ん中ぐらい、5000人の小さな町、上士幌町から来ました。面積は700平方キロメートルですから、東京23区プラス・アルファです。酪農、畜産、林業、観光と第一産業を軸にしています。

いま農業関係が飛躍的に伸びていて、今年、ミラノで万博をやりましたが、うちの和牛が北海道代表でレセプションに出されました。そういったことで、ふるさと納税が大人気で、26年度は全国で3番目、北海道で1番です。5万5000人ほどから寄付をいただきました。その数だけ応援団がいると思って、これから縁を深め、町をみんなで元気にしていこうと考えています。

笹原 私ども朝日町は富山県の東の玄関口、新潟県との県境にあります。人口のピークは2万4000人でしたが、今年1万3000人を切りました。富山県の農業は兼業農家が多くて、近くには有名な吉田工業（YKK）さんがあり、

働きながら農業をしています。北アルプスの山々に囲まれて海もあり、海拔0mから3000m級の山があります。大きな魅力は翡翠が採れることです。勾玉文化で、卑弥呼の時代から朝日町で加工が行われ、それが出雲やいろいろなところへ行っています。

NHKにも出しましたが、北アルプスの山々と桜並木、チューリップ、菜の花を入れて春の四重奏です。旅行会社の方が「スイスには山があるけれどもチューリップがない。オランダにはチューリップがあるけれども山がない。ここは世界に誇れる」という。今年も1日最高で2万8000人の方が来られました。地元の方々がその時期に合わせて品種を選び、早生のチューリップを植えています。切り花は新潟県ですが、チューリップの球根は全国で富山県が一番です。2年ほど前には氷河があることもわかりましたし、そういった自然を売っていききたい。

昨年は松島に次いで、富山湾が全国で2番目に「世界で最も美しい湾クラブ」に加盟しました。富山湾は魚が豊富で、自然の生簀と言われるぐらい水が豊かです。きれいな海を絡めながら、取り組んでいきたいと思っています。

見城 いまのお話からも、上士幌町と朝日町は対照的ですね。広くて、限りなく空が続いていて大地という感じの上士幌町と、山あり、山里あり、海ありの朝日町ですが、町を運営していくにあたって考えておられることは何ですか。

竹中 地方と都市とどう交流を図るか。人口減少は必ずいぶん前からですが、それを経済の面でどう止めるかと考えたときに、都市との交流をいかにするか、都市にどうメッセージを発信するか。このブースに出させてもらうこともそうですが、地元よさがあってもそれを伝える手段がなかった。ようやくいまい少しが見えてきた感じがします。

小さな町でも、そこしかないものがある。それが必ず都市の人から評価されると思いついて進めてきて、それがこれから実践できるのではないか。具体的に都市の人との交流をさらに深めることによって、人的交流、物の交流、人材の活用、物流による経済の活性化が少し見えってきました。

「自治体が消滅する」は素晴らしいフレーズ

見城 2040年に日本の896の自治体が消滅すると言われましたが、「自分のところは入っているのか」と思われたでしょう？ どうですか。

竹中 入っています。いままでの統計や推計でやっていますからそれは事実として受け止めて、あとは政策でどうするかです。可能性があると思っています。あれが出たので町の将来はないと思う必要はないでしょう。

笹原 「消滅する」はすばらしいフレーズだと、逆に感謝しています。笑っちゃいますよ、って話じゃないですか。

それをどのように施策に生かして打ち出すか。危機感を煽っていただいていたのではないかと。平成の大合併をしましたが、コミュニティを大事にした場合、合併ありきでよかったのか。朝日町は平成18年に黒部市、宇奈月町、入膳、朝日の1市3町で合併しようという話をご破算になったのですが、富山県自体、47都道府県で自治体の数が一番少なくなりました。民間であれば統合すれば合理化になりますが、地域の市民や町民への住民サービスの展開は逆の方向へ向いている。小さな町だからできるオリジナルというものがあるんです。

竹中 うちも議論して、最終的には自立すると。当時、合併は、財政コストをどう抑えるかがたぶん国の方針でした。合併したところは、最初は支所があつてやっていますが、やがてニーズがなくなつてどんどん減っていくわけです。結局は本丸があるところだけが何となく

残つて、周辺は全部さびれていく感じですよ。

見城 それは多くのところで伺っています。ももとの中心はよかったです。でも、いろいろなものが集中してしまつて、周辺にあつた小さな自治体が本場に不便になつた。そういうことで住みづらくなつて、合併症という症状が起きていますね。

竹中 いままでの財政のやり方を見直すチャンスだったんです。地方交付税が毎年、何パーセントずつ伸びてきましたから、伸びる分だけ住民サービスができました。ところが、まったく逆のパターンになりました。ですから、意識を変えて、住民サービスは前みたいにはできない。維持するためには住民参加です。いままでお金で解決していたことを自分たちでやる。そのような工夫をして、従来のコミュニティがちゃんと残る。自分たちで頑張るとそれなりの成果が出てくる。農業も大きく変わってきました。大規模に

なり、法人化し、農家戸数は減りましたが、生産力はグンと伸びた。

また、希薄化したコミュニティを復元させる意味ではNPOの力が入ってきた。お金をかける部分をNPOに頑張ってもらい、余分に付けていたお金を減らし人間関係の希薄になった部分を補つて、NPOが共同の大きな受け皿になってきました。役場の窓口は、うちの場合はNPOがやっています。北海道の中で上士幌町だけです。

見城 ふるさと回帰の場合は、移住を自分たちができるかたちでやっています。そうしたら、やはりNPOというかたちでした。これがビジネスだったらサービスは全部代金になる。やらなくてもいいことまでやつて費用をいただくことになるけれども、NPOですから本当に平等に、やれることをやろうということです。

笹原 私のところは入り口の段階です。町民の意識を変えないとドラス



ティックに変わらないうらうという思いがありました。そういう意識の中で、この1年あまり、あらゆる施策を打とうという事で進んできたのが現状です。

ふるさと納税もわかりですが、竹中さんのようにトップが施策を打つ。「何か動いている」と見え始めて、町民の意識が若干変わってきたのが現実だと思っています。公募で若い世代に手を挙げてもらって、そのメンバーで朝日町の再生会議で、いろいろ議論してもらおうと公約しました。

1月から3週間に1度のペースで2時間半、しっかりと議論して、14回目に建議書を書いていただきましたが、本当にやる気のある素晴らしいものが出ました。

県も「これはすごいね」と言う。普通、会議は杓子定規に終わってしまいますが、違う。町民参画でやることによって町が動くと思います。小さなことでも結果を出していくことが求められると思います。たとえば保育料の第二子半額、第三子以降無料化、特に第二子半額や延長保育も9時まで無料でやっていますが、そういったことも県内で初めてです。隣の町からでも預けていただける流れができた。トップがいかに動くか。小さな町だからできると思います。

竹中 物理的というか、いわゆる経済的な支援も、質的な面も、両方合わせて上士幌ならではの政策をしたいと思えます。子育ても、人口減少の大きな柱の一つに据えています。全体的に見ると、都市から地方に来て勤務している方は、



だいたい単身赴任で来ます。この逆のパターンができないだろうか。上士幌に来ても子どもたちがたくましく、体力も学力も、さまざまな体験もできるようにする。東京では学習の選択肢はいっぱいあり、お金があれば体力をつけるためにジムなどへ行ける。北海道でも学力、体力はトップクラスにしよう。そして、山があつて川があつて、農業、ボランティアの活動とか、生きる上で必要な体験を具体的にしましょう。これは絶対、東京に勝てる話だし、具体的な数字が見えてくれば、安心して田舎のほうがいいのではないだろうか。

オンリーワンの保育・教育・医療を目指して

竹中 学校、社会教育、家庭も含めて、子どもたちが24時間、生活するわけですから、どの時間帯に、どんなことをやっていくのか。体系化したしつかりしたプログラムをつくりながら、5年間で

具体的に答えを出していきたい。新しい田舎暮らしのあり方、職と住はどうあればいいのか。都会は便利ですがすべてすぐれていると思うのは、ちょっと間違いがあるのではないかと提起したい。

全国からいただいているふるさと納税の基金をどうお返しするかは大きなテーマで、将来を担う子どもたちにお金を使わせてもらう。子どもたちは上士幌に住むわけではなく、いろいろなところで活躍してほしいという願いもあります。そうしてやりたい。田舎へ来ると外国との距離が遠くなる、国際感覚に乏しくなると言いますが、いまは幼稚園に外国人を常駐させて、日常的に英会話をやっています。

笹原 富山県そのものが教育では全国レベルだろうと。その中でも朝日町が、たとえば保育料等でもトップクラスになれば、全国でオンリーワンになれるのではないかという思いがあります。待機児童はいないし、富山市まで50km圏内で、

高速を使って40〜50分で行ける。働く場所があり、環境が整っているとすれば移住定住も十二分にあるだろう。オリジナリティはあると思います。

見城 上士幌はもともと農業、畜産で、いろいろな課題があると思いますが、**竹中** 求人がなさそうに見えるけれども、農業関係、農業法人など意外とあるんです。いまうちの町には北海道でも牛乳をしぼっている法人があります。畜産も2万頭ぐらい。農業が家族経営から会社になつてきて、従業員が足りない。うちの耕地面積は、普通の畑作でも40haが平均です。

笹原 すごくですね。うちは10分の1です。

竹中 また、住宅を建てるなら、1人当たり100万円の助成をします。3人なら300万、住宅の新築に助成をします。費用負担を徹底してやる。それは単なるバラマキではない。北海道全体を見ると格差があります。これはそう簡単

には埋められない。であれば違った視点で、子どもが育てやすいといったところを行政面の支援策として徹底してやろう、あるいはやっているところだ。

見城 支出がオーバーで自治体が破産するのではないかと思いますか？

竹中 はい。そういう基金や、いろいろなことを節約しながら、給料面では明確な格差がありますが、医療、介護が遅れているかという点、まったくそうではない。うちにある介護施設に入ると、

介護度が低くなります。ということは、介護報酬が少なくなる。経営としては、あまりよくありません。町も応援するから頑張るように言っています。

民間の介護施設関係が効率的に儲けようとするれば、介護者は静かで、人手がかららないのが一番利益が上がる。そうではなくて、死ぬまでどう自分らしく生きるかが大きなテーマのはずで、そこをやる。医療も、いかにして第1次医療、第2次医療、第3次医療のネットワークをどうやるか。

見城 医師が足りない、看護師が足りない、介護士が足りないという不足の話ばかり聞きますが、そのあたりはどうですか。

笹原 私のところには公的病院があります。ピーク時に20数人いたのがいまは12〜13人で、非常に厳しい状況です。看護師も足りない。ただおかげさまで朝日町は富山市から50km圏内のエリアで、町には公的病院があり、民間の48ベッド

の個人病院もあります。県は9月からドクターヘリを導入して、12分で行ける。医療も充実していると思います。町は医師不足ではありますが、町民からすると十二分なものだと思います。ブースの中にも、介護士、看護師を確保する用意が入っています。そういう戦略も、ブースを出した一つの要因です。

都会の役割と 地方の役割の明確化

見城 自治体の役割と機能を超えるぐらいやっていらつしやる感じですが、持続可能か心配です。

竹中 そのへんは、ちゃんと基金を積み立ててやっています。全体で60億です。ただ、子育てとか特別なサービスは、それなりにしっかりした、10年ぐらいの担保は取っておかないと。幼稚園も保育所もただにする、いつまで続くかと心配されるわけです。そのための基金としてそれは大丈夫ですよと伝えます。

もう一つは、50000人の自治体がいかに健康寿命を延ばすか。高齢化率は30数パーセントです。乳がん検診は、100%を目指そうというキャンペーンをしています。男性のガンの検診率も高めます。リハビリや運動療法も片方でやる。いかにいつまでも健康でいるか。病院に入ることが幸せなことではなくて、自分たちでどう自立するかが大事です。いかに病院に入らないようにするか。

見城 介護士さんとか、大丈夫ですか。よく成り立っていますね。マジックみたい。

笹原 逆に、小規模だからできるんじゃないですか。

竹中 「日本一のケアを提供する」という冊子をつくっています。「おむつをしない」という施設の方針で頑張っています。すごく高く評価されています。もちろんよそから受け入れる老人ホームと、地域密着型、地域の住民が入る施設はできたばかりです。

いままでも70床とかの病院はありましたが、そこに入っている人の大方は要介護者です。社会的入院と言われている人です。病気を治すのではない。でも、それがあることによって安心する。それは意識を変えていかなければ。ソフト食とか、非常に一人ひとりにきめ細かいサービスを提供するとか。

見城 老人ホームが一番お金がかかるじゃないですか。介護士も離職するし、本当に大丈夫ですか。

竹中 今年、地域密着型の施設をつくりましたが、つくったときに従業員を募集するのではなくて、1、2年前から募集しています。住宅は、従業員住宅として建てる場合は、町が1戸当たり何百万という支援をしています。

笹原 うちも75億近い基金があつて、過疎債の適用も受けていません。夕張のように粉飾決算しない限り、普通はちゃんとできるんです。ただ、気をつけなければいけないのは、はたしてまともなも



のに使っていたかということはありません。県やいろいろなかたちの下でしっかりとやっていれば、そこは問題ないかと思えます。

来年から、私のところは第5次総合計画を5年、10年のスパンで練ります。私もは介護士、看護師を確保したいがゆえに、昨年4月から、移住定住も併せてこのブースを出しました。それが大きな要因です。単なる観光PRではない。

取り組みの話がありました。うちは昔から町民一スポーツというかたちで、ビーチボールの全国大会は今年で32回を迎えます。ビーチボール発祥の町でもあります。全国大会をやりながら交流人口を拡大するとともに、町民一スポーツの中で健康を取り戻す。

直近では、ノルディックウォークをやっている笹川地区に県と国の補助金で「ささ郷ほたる交流館」を建て、6月に石破大臣に視察に来ていただきました。そこにはスイスの方、チェコの方が家族で定住していただいています。近くに里山があり、非常にコンパクトな中で、施策と併せてやっているところです。

竹中 以前とはずいぶん違ってきています。昔はドブ板で、議員さんの選挙区の庭先をどうするという時代があったけれども。

笹原 そうそう、いまはそういう時代ではありません。

竹中 移住定住の話はしますが、どんなに声をかけても、見栄えをよくして

も、最終的にはまちづくりがしっかりしていないと関心を持ってもらえないと思います。子育てもそう、高齢者になって、安心してその町で生きることができるとか。

東京の一極集中で、いびつな日本列島になっている。地方にもそれなりの役割があり、東京にも役割がある。地方に対する目の向け方が、いままでもっと足りなかったところがある。もう一回、地方にどんなよさがあるのかをみんなで確認すれば動いてくるでしょう。安心して子育てできる、老後を過ごすことができる。そういう行政サービスがしっかりしていないと、いくら言ってもできません。明治以降、「都へ向かうことが出世のすべてだ」という意識がまだまだあると思います。江戸時代、各藩に独自の文化があって地方自治があったように、地方は地方のよさがある。住んでいる人も、そう思わなければだめです。

重要なことはトップと職員の間 気概と心意気

見城 そういう意識を変えるのはなかなか難しいですが、ふるさと帰帰支援センターの情報の場を通じて意識改革をしていくこともできるのではないですか。

竹中 民間、行政、さまざまところで移住定住のプロモーション活動をしています。北海道もやっていますが、ふるさと帰帰支援センターは東京の真ん中から、これだけの規模でやっている。先





駆けてやっているし、ノウハウも持っている。田舎へ行きたいといったときに、たぶんワンストップの窓口はきつとここが一番です。

統計の話ですが、2005年から2010年までの人口の減少率の統計があります。当然、推計は出ていましたが、蓋を開けてみると結果は全然違ってました。減り方は少なかった。政策を打てばやれるということです。

1年における増減はあるけれども、長期的に見るといける。朝日町みたいに大きな企業があればいいですが、北海道はそうはいかない。そうはいかないけれども頑張ってる。

笹原 看護師とか介護士を取り合っているけど、少子化の自然減はやむをえないと思いますが、転入・転出をしっかりとやるのが一つと、もう一

つは結婚しない世代対応と、出生率をいかに高めていくかがポイントだと思えます。それをしっかりとやれば、急速には減らないだろう。

たとえば看護師には奨学金制度を設けていて、糸魚川市とやっただけです。だれでもではなくて、ほしい人材の確保のためにこのブースを設けた。それで、一番にやろうと決断しました。結果を出していくことによって町民も変わってくると思います。

竹中 「成功事例を見てからやりましょう」ということがあります。それは、ほとんどは身につかない。最初に困難な中で新たなものを開拓したり、試行錯誤し、失敗を繰り返しながらやって、そこで成功した財産は、2番目では絶対に得られない財産です。先頭を走っていると後ろの人がどんな顔をしているのか、疲れた顔をしているのか、まだまだ頑張れそうな顔をしているのかよく見えるけれども、後ろの人は前の人の頭のうしろしか見えない。どんな顔をしているか見えない。先を走っていることはそうだし、先を走っていて転んだとしても、たんこぶができるぐらいで大丈夫です。後ろ向きに転んだら、バンザイしてしまう(笑)。

1番目と2番目は相当違います。

見城 心意気ですね。それは通じるものがあるのではないのでしょうか。ふるさと回帰支援センターへ一歩期待するところは何でしょうか。

竹中 たくさんセンターに来てもらって、ここを中継して上士幌に関心を持ってもらいたい。いろいろなイベントがこ

こでできるということはすごいことです。窓口になってもらえる。

笹原 トップの姿勢、職員の姿勢で情報を発信するという気概、心意気というものがあるのかなと。自分自身もセンターに来て「朝日町はいいところなんだな」と、「ひよっとしたら、朝日町は医療体制でも非常に恵まれている」といったことを皆さんにPRしながら、当たり前のように非常に付加価値があったと、ここへ来てつくづく教えられることがありました。

見城 これだけ大勢の自治体があつてみんながいいことを言っている中でどれだけ目を止めてもらえるか、足を止めてもらえるか。町や県の意気込みがわかってくるのではないのでしょうか。

竹中 都市から地方へ人を送ることは国策として動いているから、こういう場所が必要になってくる。いまよりも、もっともっと求められてくる。移住定住もそうですが単に人が増えるということではなくて、いろいろな価値を持つた人、キャリアを持った人が地方に来るというまちおこしです。お金がかかるわけではない。新しい刺激がそこにあつて、従来からいる人と新しい人が混じり合うことによって必ずいいものが生まれてすばらしい財産になる。

高齢者の移住定住が2008年からやっていままでも100人来ていますが、

高額医療費を払った人がいるか、介護施設に入っている人がいるかというところ、ほとんどいません。移住定住で来る人はアクティブな人です。病人は来ません。みんな元気です。

笹原 朝日町の自然、富山県そのものの幸福度、働く場所を、これからふるさと回帰支援センターでどのように発信していくかが大事だと思います。自然に恵まれた歴史的な環境、翡翠の文化などをいかに磨き上げて皆さんに発信し、高めていくかが、大きな課題だと思います。トップがやる気のあるのとないのと、全然違うんです。このセンターにブースを出すことも、トップ判断です。

見城 私は東京に暮らしていますが、半分は青森に通い単身赴任のようにして行っています。今週も先週も行きました。青森にありがたう、です。空気が違う、水が違う。ここにいる場所があると思つたときに、すごくよかったという気がするんです。それを多くの人に感じてもらいたい。

センターが、それをわかっていただくきっかけになれば。また、わかっていただくためには、今日のお二方の町長さんのように、ものすごくエネルギーに働きかけてくださることだと思います。話を伺って見えてくると、やれるかなという気持ちになる。これが動き始めるきっかけになると思います。やっぱり、ふるさとがあるっていい。ありがたうございました。

高年齢者の移住定住が2008年からやっていままでも100人来ていますが、

ふるさと相談員 わがふるさとへの思い

栃木県



相談員 関百合子

「とちぎ」と聞いて、どんなイメージをお持ちですか？
「…餃子！」「…苺！」。県外の方に投げかけると、必ずといっていいほど「…」の“間”が生まれます(笑)。栃木県相談員として相談者の方に質問をしてもほぼ同様のリアクション。まだまだ栃木の認知度は低いなぁと少し落ち込む瞬間です。

しかし「日光に行かれたことはありますか？」「益子焼をご存知ですか？」栃木が誇る名所名物を挙げると「ああ～行った！」「知ってる！」と、これまた必ずといっていいほど同様のリアクション。こうなると皆さん少し前のめりに「もっと栃木話をしたい」という姿勢になり、話が盛り上がります。栃木の認知度はなかなかのものだと少し満足感に浸る瞬間です。

多くの方が、知らないようで意外と知っている栃木県。だからこそ「一回行ったことがある」「何となく知っている」で済ますのは勿体無い！と感じています。連山や美しい水が流れる自然の景色、豊かな自然によりもたらされる美味しい食べ物、控えめだけど人情深い人たち、しっかりローカルを感じつつ東京へ1～2時間というアクセスの良さ。言葉で挙げられる魅力は沢山ありますが、本当の魅力はぜひ栃木を訪れて実感いただきたいです。

今こそ栃木が大好きな私ですが、少し前まで「地元だけれど、特別好きでもなければ嫌いでもない」と感じていました。東京で暮らしていると地元の情報が入ってくることはほとんどなく、好き嫌いの判断基準がなかったためです。しかし、ふとしたきっかけで栃木の人たちと繋がりができ、情報が入るたびに新たな発見があり、現地を訪れ人と交流するうちにみるみる栃木が好きになりました。「きちんと知る」ことで、短い時間でもその地が大好きになるものです。相談員として、一人でも多くの方に栃木の情報をきちんとお伝えし、栃木を好きになっていただきたい。皆さんと栃木の出会いのきっかけを、たくさん作っていきたくです。

秋田県



相談員 進藤 津野

海と山に囲まれ、自然に恵まれている秋田県では、四季折々の豊かな自然とおいしい食べ物を楽しむことができます。豊かな土地ゆえか、秋田で生まれ育った人はおらかな人が多いと思います。嬉しいことに最近によく「秋田の土地柄の良さや“秋田の人”に触れて惚れた。」という人の言葉を多く耳にします。そんな秋田を気に入って、そこで暮らしたいと考える方も少なくありません。

秋田県が平成27年度に作成した「秋田県の日本一と全国ベスト3」では、食糧自給率は全国第2位、刑法犯認知件数(人口10万人当たり)は全国最小、刑法犯検挙率は全国1位、住宅の一戸建て率全国1位、公立学校の児童・生徒の学力が全国トップレベルなど、秋田で暮らすことの魅力を物語る数字が紹介されています。このデータから、秋田県は安全で、家族とのびのびと過ごせる場所を確保しやすい、また豊かな食生活をおくる事ができ、教育に係る指標の多くが高水準、子育てに向いた環境であるといえます。

そんな秋田県では、移住・就職に関する相談窓口として「あきたで暮らそう！Aターンサポートセンター」を有楽町の交通会館5階に設置しています。今年度の移住希望登録者の傾向をみると秋田県出身者、秋田にゆかりのある人の登録が多く見られます。主に20代～30代が半数を占めており、多くの若い人が地元で暮らしたいと考えているのがわかります。

いずれは秋田で暮らしたいと考える人、それぞれに望む暮らし方を探しているかと思います。Aターンサポートセンターではそういった方々の思いを聞き、寄り添ったサポートができるよう相談対応に臨んでいます。日々来訪者の方とお話をして、移住への第一歩として「まず相談する」ということは大切なのではないかと感じております。小さなことでもかまいません。お気軽に相談窓口をご利用ください。皆様のお越しをお待ちしております。



高知県

熊本県



移住・交流コンシェルジュ 竹崎澄江 安岡佳香

四国の南、太平洋を抱くように大きく両腕を広げた形の高知県は、四万十川、仁淀川など全国に名の知られた清流も多く流れ、豊かな自然と温暖な気候に恵まれた県です。

高知を移住地として選ばれた理由をお聞きすると、こうした自然や気候に加えて、これらに育まれた高知の食やおおらかな県民性を挙げられる方が多くいらっしゃいます。

東京相談窓口を担当しております、私コンシェルジュ竹崎は、高知県の東部地域に位置する、人口約3,900人の小さいながらも元気な村、芸西村出身です。

幼少期に英会話スクールに通っていたこともあり、海外へ強い興味があった私は、ニュージーランドへの留学を経験しました。海外に出て、日本人、そして高知県人として自分自身を表現していく中で、はじめて故郷を見つめ直し、自分の生まれ育った環境がいかに素晴らしいものだったのかに気づきました。

自然の豊かさや人のあたたかさなどを感じながら生活できる環境は、人間本来の大切な部分が磨かれると私は思います。

「移住」は「自分らしく生活できる場所」を求めて考えることだと思っており、その地に高知を選んでいただけるのであれば、全力でサポートさせていただきたいと考えております。

東京では「ふるさと回帰支援センター」内と、すぐ近くの銀座にある「高知県アンテナショップ まるごと高知」の2ヶ所に窓口を置いて、ご相談を承っております。また高知でも、平日は高知県庁3階「移住促進課」で、そして、土日祝日は高知駅前の「観光情報発信館 とさでらす」にて、ご相談いただけます。

高知県への移住をご検討の際は、まずはコンシェルジュまでご相談ください。

みなさまのお越しを心からお待ちしております。



専属相談員 池田真麻

いつも東京から熊本へ飛行機で帰り、熊本空港へ足を踏み込んだ瞬間に、「あ〜熊本に帰ってきた!」と実感する不思議な匂いというか、空気があります。熊本は盆地ということもあり、東京よりは湿気も多く、夏は特に蒸し暑さを感じますが、それが私にとっては懐かしく、安心感を与えてくれるものでもあります。

熊本県玉名郡和水町に私の実家があります。熊本空港からは車で1時間半〜2時間といったところでしょうか。里山に囲まれ、「田舎」という言葉の似合う自然に溢れた所で、歴史の教科書や資料集に載っている「江田船山古墳」という大きな遺跡があることで知られる町です。

家はずいぶん昔から建っている旧家で、母曰く築100年は経っているとのこと。しかしながらとてもしっかりした作りの家で、改築に改築を重ねて、見た目は割と今風です。

家の裏手には一級河川の菊池川が流れています。なだらかで雄大な川面に、晴れた日はカヌーが尾を引いて浮いているのが印象に残っています。食卓から見えるその眺めは、我が家全員の自慢でもありました。

大学進学と共に上京して9年、東京での生活を体験して、改めて熊本の良さを感じることができるようになりました。澄んだ空気、美しく豊富な水資源、新鮮な食材はもちろんのこと、自然の中でゆっくりと流れる時間、熊本のあたたかい人たちとの何気ない会話が自分に与えてくれるのは、東京では得ることのできない「心の豊かさ」だと感じています。

熊本へ移住をしたいと言ってくれる方がいらっしゃるのには、熊本人としてとても嬉しいことです。熊本を「ふるさと」として末永く暮らしていただけるよう、県・各市町村と力を合わせ、相談者のみなさんに寄り添っていきながら全力でサポートしたいと思っています。

両親や祖父・祖母、親戚、友だち…熊本みんなの顔を思い浮かべながら、熊本をもっと元気にしたい!という気持ちで毎日取り組んでいます。

田園回帰1%戦略（地元）に人と仕事を取り戻す

島根県中山間地域研究センター 研究統括監
（島根県立大学連携大学院 教授）

藤山 浩



1 集中型国土の限界と田園回帰の始動

（1）集中型国土の形成とその限界

今、私が「2015年危機」と呼んでいる危機が、中山間地域と都市において同時に進行しています。

まず、中山間地域では、2015年に、この半世紀の間、社会と産業を「主力世代」として支えてきた「昭和ひとけた世代」が全員80代になり、急激な引退局面が訪れています。待ったなしで次世代の定住が始まらない限り、集落も農林漁業も存亡の危機に見舞われることでしょう。

同時に、都市では、2015年に、中山間地域から流れ込んだ最初の世代である「団塊世代」が、全員65歳以上の高齢者になります。「団塊世代」が集中的に入居した1970年代後半から1980年代にかけて整備された郊外団地では、現在、爆発的な高齢化が起きています。その高齢化率は、この2010年代後半、確実に中山間地域を上回ることでしょう。

このような中山間地域と都市において同時に発生している持続性危機は、決して偶然の一致ではありません。ひたすら「規模の経済」を志向して大量の人口を移動させ、集中型の国土を作り上げてきた必然的帰結なのです。団地の整備にしても、短期間で大規模で集中させて行ったために、今、地域一斉高齢化という前代未聞の高いツケを払っています。また、急成長した大量消費文明は、地球温暖化という究極の限界にぶち当たっています。

地域社会も国土も地球全体も、「1周目」の過度な規模拡大路線の限界に直面し、「2周目」以降へと持続する展望が見えない時代状況です。私たちが向かうべき方向は、「市町村消滅論」による切り捨てでも、これまでの成長至上路線の焼き直しでもありません。また、これからアジア・アフリカ諸国が、日本と同じような人口の都市集中を推し進めることは、地球環境の容量からも不可能です。私たちは、今一度、バランスのよい都市と農山村の共生を実現する中で、長続きする地域社会のあり方を取り戻していかなければなりません。今、私が提唱している田園回帰は、そうした循環型社会を足元から築いていく「地元（の創り直し）」を目指し

ているのです。

（2）「田舎の田舎」で次世代の定住増

このように集中型国土の限界と循環型社会への転換必要性が見えてきた2010年代、「過疎」の先進県として知られてきた島根県において注目すべき現象が起きています。

図1は、島根県中山間地域を小学校区・公民館区といった227の一次生活圏に分けて、30代女性の増減数を示したものです。4割を超

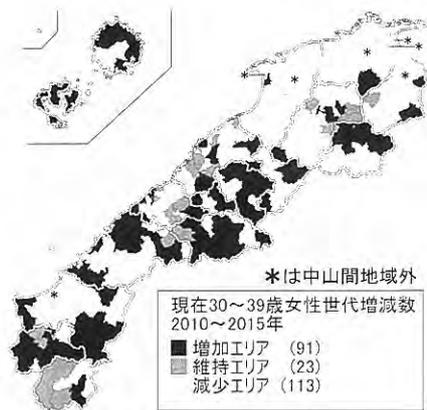


図1 島根県中山間地域における30代女性増減数

Profile ふじやまこう

1959年島根県生まれ。一橋大学経済学部。1998年より全国初の島根県中山間地域研究センターに勤務。2009年より島根県立大学連携大学院教授(兼務)。2013年より現職。博士(マネジメント)。内閣府まち・ひと・しごと創生本部「中山間地域ワーキング」有識者委員など。島・県委員多数。著書に「田園回帰1%戦略～地元）に人と仕事を取り戻す」(2015年、農文協)など。

える91地区(40・1%)で30代女性が増えています。維持(23地区)も加えると、過半の114地区になります。しかも、増えている地区は、市役所等がある都市部から比較的離れた山間部や離島に目立つのです。

このような「田舎の田舎」への次世代定住が増えている背景としては、次の2つの要因が考えられます。まず、都市からの移住を促す「プッシュ要因」としては、積極的に都市生活を「卒業」して移住する人は、中途半端な「田舎の都会」ではなく、自然や人、伝統とのつながりが息づいている「本格的な田舎」を目指しています^{*2}。松永桂子氏が近著「ローカル志向の時代」において各地の事例を基に描き出していらっしやるように、現在30代を中心に、新しい地域に根ざした暮らし方・働き方を選択する人々が増えてきているのです^{*3}。一方、移住を受け入れる地域側のプル要因としては、「昭和ひとけた世代」の引退により縁辺地域ほど農地や家屋が空き始めており、「一緒に頑張ってくれる人であれば受け入れたい」と地元の人々の意向も前向きとなっております。

島根県では、早くから「過疎」が進み、定住の取り組みが先行していることも、次世代定住の背景となっています。市町村には、専任の定住コーディネーター等が配置され、県全体として定住の取り組みを進める財団(「ふるさと島根定住財団」)が全国で一番早く1992年に設立されています。

こうした田園回帰の必要性と始動を受けて、次は、具体的な展開の戦略を考えていきます。

2 人口の1%を取り戻す

(1) 1%の定住増加で人口は安定化

これから田園回帰を進めていく上で、まず必要なものは、どうしたら地域の人口を安定化できるかというビジョンです。今年度「地方創生」においても、全市町村でそうした地域人口ビジョンを策定しています。しかし、残念なことに、本部から配られた予測プログラムをあまり理解しないままに使い、簡便に数値を入れやすい「合計特殊出生率」や「社会増減全体の均衡化」だけで操作してしまっている自治体が多数を占めています。これでは、過去の半世紀にわたり人口が流出してきた多くの中山間地域自治体は、人口の安定化を実現できません。つまり、過去の流出世代をバランス良く取り戻す定住増加の実現無くしては、いくら出生率を上げて(例えば3.0等)無理なのです。

私が、中山間地域研究センターで独自に開発した人口予測プログラムは、5年前と現在の男女5歳刻み人口を入れるだけで、現状推移に基づく人口の将来予測だけでなく、人口安定化に向けてどの世代で毎年何組の定住を増やせばよいかという具体的な「処方箋」が出来ます^{*4}。図2は、島根県中部の中山間地域にある邑南町全体の分析事例です。

2010～2015年の現状の人口動態がそのまま推移した場合の人口と高齢化率と、20代前半男女・30代前半子連れ夫婦・60代前半

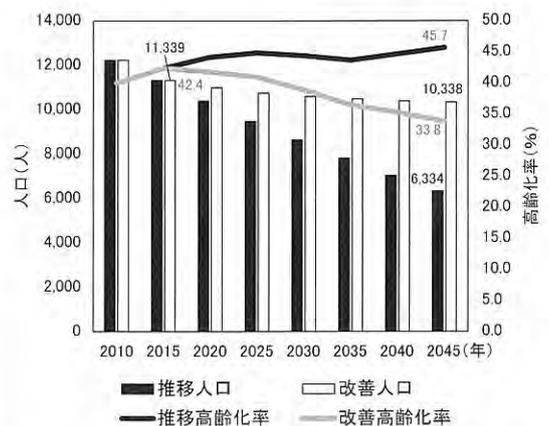


図2 島根県邑南町における人口ビジョン例

夫婦を各15組(合計45組・105人)の定住を増加させた場合とを比べています。毎年人口の1%弱(町人口全体は11339人)の定住を世代のバランス良く増やせば、人口の安定化が達成できることがわかります。

同様の予測と「処方箋」を、よりきめ細かく全県227の地区で実施し積み上げたところ、合計して1251世帯・2920人の定住を増加させれば、全地区の人口安定化が可能になります。これは、島根県中山間地域全体の人口298397人の1%弱に当たります。また、昨年度策定された「国土のグランドデザイン」の資料にも、私の「1%戦略」が紹介されており、2010年時点における全国の山間地域に当てはめても、人口の安定化はほぼ達成されることと立証されています^{*5}。

*1 2015年において30～39歳の女性について2010年における25～34歳時に比した増減数。

*2 2013年7月13日開催の「はじまった田園回帰」シンポジウム(中山間地域フォーラム主催)における土屋紀子さんの発言。詳しくは、『はじまった田園回帰』農文協ブックレット(2015年)。

*3 「ローカル志向の時代」松永桂子、光文社新書、2015年。

*4 「人口安定化」とは、30年後を基準として、①人口全体の安定化(減少しても現在の9割以上)、②高齢化がストップ(高齢化率が低下もしくは上がっても40%未満)、③14歳以下の子供数の安定化(減少しても現在の9割以上)の3条件を同時達成として定義。

*5 高齢化と子供数は前述の安定化条件を達成し、人口全体だけが現状の8割程度となる。

(3) 全国的展望と地元単位の取り組み

毎年2920人という数字は、首都圏人口3562万人の「1万分の1」にしかありません。仮に、島根県の中山間地域と同じ人口還流を、全国40の道県が進めたとしても、その合計は10万人強です。実際には、国の「人口ビジョン・総合戦略」がその解消を打ち出しているように、東京圏への入超は毎年10万人ペースです。これらの入超人口を無理に東京に集めずに地方に分散していけば、ある程度全国の中山間地域(2010年時人口合計1470万人)の人口安定化は見えて来るという図式となっています。

また、住民が主人公となり地域人口の安定化戦略を実践しようとする、市町村全体で定住目標を掲げるだけでは、地域現場での具体的なアクションはなかなか生まれません。定住の舞台となる小学校区や公民館区等の一次生活圏である地元ごとに、地域を守るために必要な定住増加目標を算出し、対応して求められる仕事創出や住宅整備を具体的に考えていくことが不可欠です。

図3は、邑南町内の12の公民館区について、現状のまま推移した場合と定住を地域人口安定化水準まで増やした場合の人口シナリオの一覧です。

人口安定化に必要な組数は現在の定住状況や人口規模によってまちまちですが、半分の6地区では、各世代1組(合計3組)以下の定住増加で十分です。毎年みんなで「指で数えて」確認できる目標となった時に初めて、住民にとっ

地域名	シナリオ1:現状のまま推移する					シナリオ2:定住を増加させる							
	現状2015年		2045年(現状推移)			毎年の定住増加必要組数(各世代)	2045年(改善)						
	人口総数	人口増減率	高齢化率	小学生人口	人口総数		対2015年人口増減率	高齢化率	小学生人口				
阿須那	795	-12.9%	54.0%	31	293	-63.1%	65.1%	8	1.8	720	-9.4%	37.6%	53
井原	706	-6.6%	41.6%	25	570	-19.2%	42.0%	20	0.3	661	-6.3%	38.2%	26
口羽	778	-12.8%	55.9%	26	243	-68.8%	60.0%	7	1.7	705	-9.4%	32.0%	49
高原	933	-6.5%	44.3%	43	634	-32.1%	40.9%	16	0.8	880	-5.7%	33.4%	39
市木	470	-6.6%	43.8%	20	548	16.5%	27.7%	40	0.0	548	16.5%	27.7%	40
出羽	896	-6.3%	37.7%	40	585	-34.7%	42.7%	16	0.9	840	-6.2%	33.6%	38
中野	1,546	-5.4%	38.6%	57	766	-50.4%	58.1%	17	3.0	1,423	-8.0%	39.9%	61
田所	1,840	-4.3%	43.2%	86	1,298	-29.4%	39.4%	68	1.3	1,667	-9.4%	34.0%	102
日貴	509	-13.1%	47.9%	17	190	-62.7%	71.2%	1	1.4	478	-6.0%	40.4%	16
日和	431	-4.6%	44.8%	12	332	-23.1%	38.0%	12	0.0	395	-8.3%	34.0%	17
布施	200	-14.2%	52.5%	6	89	-55.7%	49.5%	6	0.6	185	-7.6%	31.3%	16
矢上	2,235	-6.8%	34.2%	131	1,516	-32.2%	41.2%	75	1.7	2,020	-9.6%	34.4%	128
合計	11,339	92.6%	42.4%	494	7,063	-37.7%	44.2%	286	13.5	10,523	-7.2%	35.1%	585

図3 邑南町における公民館区ごとの人口シナリオ一覧表

て達成可能な身近なものになります。中には、市木地区や日和地区のように、すでにここ5年間の定住状況により人口安定化を達成(定住増加必要組数が0)しているところもあります。こうしたところは、首長さんが表彰してあげて、そのノウハウを学び合しましょう。

ちなみに、邑南町の総合戦略は、こうした12公民館単位の地区別戦略を展開していく内容

となっています。是非、そうした市町村全体と地区別の「2階建て方式」の地域人口ビジョンと総合戦略を他市町村へも広げて行って欲しいと思います。

3 所得1%の取戻しと循環型の地域社会へ

(1) 域内循環強化で所得取戻し

人口安定化に必要な定住増加が人口1%分であることがわかれば、後は明快です。

毎年地域人口の1%が新たに定住するために必要な所得増は、当然、地域全体の所得の1%になります。これまでの自治体の産業政策は、大規模な企業誘致や特産品開発、観光振興を行って一気に巨額の収入を獲得しようとするホームラン狙いがあまりに目立ちました。実際には、「大振り」し過ぎて、「三振の山」を築く場合も多かったのではないのでしょうか。

現実には、中山間地域では、外部依存が甚だしく、食料や燃料といったかつては大部分を域内で自給していたものも大半を域外から調達しています⁶⁶。また、地方都市圏の経済循環を域外から調達している現実があるのです⁶⁷。ここまで外部依存が進んでしまっている状況を逆手にとって、毎年域外調達の1%分を取戻すことで、所得1%分の創出につなげていくような「逆転の戦略」が可能となっています。

例えば、中山間地域研究センター有田主席

⁶⁶ 島根県中山間地域研究センターの有田昭一郎・主席研究員による研究では、多くの地域で9割以上が外部依存となっています。

⁶⁷ 例えば、人口約7万人の島根県益田圏域(益田市・津和野町・吉賀町)において、住民所得総額1,556億円に匹敵する1,420億円が域外から調達されています。〔平成15年 益田圏域産業連関表(島根県)より〕

⁶⁸ 例えば、高知県四万十市の「株大宮産業」や島根県邑南町の「合同会社出羽」など。

研究員の家計調査データを見ると、各世帯は、パンを年間3万円も買っています。これは、300世帯・人口10000人の村では、ほぼ1000万円分のパンの需要があることを意味します。このパンを外から買っているから人口が減るのです。元気なイタリアの山村のように、地元の原料を使って地元で焼けば、そこに1組の定住とおいしいパンは生み出されます。

(2)「合わせ技」の組織、拠点でロングテールを活かす

長らく中山間地域では、生産やサービス提供の小規模・分散性が条件不利の源と言われてきました。そして、分野ごとに「規模の経済」を実現するために、ひたすら大規模化・専門化・広域化が進められてきました。しかし、中山間地域の本質は、細やかな谷ごとに多彩な自然と暮らしの多角形を身近な空間でつなぐ持続可能な営みにあるのです。今、流行の言葉で言えば、自然(資源)と暮らしのロングテールを切り捨てずに活かす社会技術にこそ、活路があります。

これからの中山間地域に求められる社会システムは、分野ごと・集落ごとに「0.2」、「0.3」、「0.5」といったようにこれまでの「規模の経済」の中で切り捨てられてきた小規模・分散的な資源や需要を、柔軟に横断してつなぎ直す「合わせ技」の組織や拠点なのです。自然界の生物多様性と同じく、様々な生産やサービス提供を多角形でつなぎ直す「0・X」の社会技術への進化を図ることで、中山間地域は、循環型地域社

会の先駆者として甦ることでしょう。

例えば、現在全国の定住実現に向けて勝負を賭けている地域では、住民が出資して幅広い分野を横断した事業組織を立ち上げ、小規模な生産やサービス提供を「合わせ技」で支え始めています^{※8}。

また、今回「国土のグランドデザイン」や国の総合戦略の中で打ち出されている集落地域における「小さな拠点構想は、そうした事業組織と連携して「合わせ技」の拠点として進化すれば、定住と循環を支える「砦」となり得ます。

(3) 地元のつながりの中へじっくり定住

前述したように、小学校区等の地元ごとでは、各世代の定住増加組数は、大半のところでは、1組もしくは2組で十分です。恐らく集落ごとでは、全世代合わせても、4年から5年に1組の定住増加で大丈夫なのです。

人口とは、抽象的な数字ではなく、人生の数に他なりません。一度きりの人生の重要な選択として定住をするのですから、移住する側も受け入れる側も手間暇かけて丁寧なやりとりをしたいものです。是非、住民自らが自分たちの集落を案内して、集落の良いところも苦労しているところも大切にしているところも、事前に伝えて上げてください。「誰でもよいから来てくれ」というところには誰も来ません。「選ばない地域は、選ばれない」が鉄則です。自分たちは「こんな暮らしを一緒に創りたい」という暮らしの意志をはっきりと共有していきましょ。

そして、あせって、一度に沢山の人の入れたいけません。同じ世代を一齐に入れて30年後に困っている「団地の失敗」を繰り返してはいけません。時間をかけて地域社会のつながりの中へ定着することが重要です。そこに1%戦略の「深い意味」があります。

最後に、行政の取り組みについても、一言お願いしたいと思います。田園回帰は、これまで述べてきたように、文明論的にも人生論的にも息の長い取り組みが求められます。島根県内でも10年以上が経ってきいた自治体や地域で、定住が増えています。是非、10年以上地域に寄り添う政策展開や体制づくりをしてください。2～3年の事業期間や担当職員任期に合わせて定住の成果を上げるような都合の良い事は、到底出来るものではありません。



ベテラン住民の背中を見ながら



藤山 浩著

田園回帰1%戦略～地元にと仕事を取り戻す(シリーズ田園回帰第1巻) A5判 236頁 定価 本体2200円+税 農文協 2015年6月刊 現在4刷

地方消滅の危機が叫ばれているが、毎年人口の1%を取り戻せば地域は安定的に持続できる。島根県での小学校区・公民館区単位の人口分析をベースに、定住増に対応した地域内循環の強化による所得の取戻し戦略を提案。

(目次)序章「市町村消滅論」は本当か/第1章 「2015年危機」と「大規模・集約化」の半世紀——田園回帰という希望/第2章 田園回帰が始まった——島根からの報告/第3章 人口の1%取戻しビジョン/第4章 所得の1%取戻し戦略/第5章 田園回帰を支える社会システムの設計/第6章 求められる田園回帰に向けた条件整備

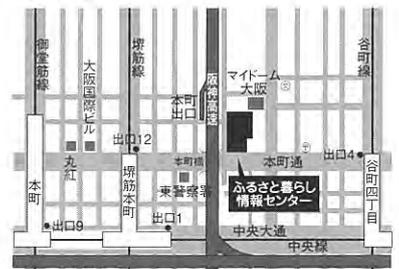
Welcome to ふるさと暮らし 情報センター Vol.27

ふるさと暮らし
情報センター・東京



〒100-0006
東京都千代田区有楽町2-10-1 東京交通会館5・6F
Tel 03-6273-4401 Fax 03-6273-4404
E-mail ginza@furusatokaiki.net
URL <http://www.furusatokaiki.net/>

大阪ふるさと暮らし 情報センター



〒540-0029
大阪府大阪市中央区本町橋2-31
シティプラザ大阪内1階
Tel 06-4790-3000 Fax 06-4790-3111
E-mail info@osaka-furusato.com
URL <http://www.osaka-furusato.com/>

「わかやま移住・就職フェア」 レポート

2015年10月17日(土)、東京交通会館12階ダイヤモンドホールにて「わかやま移住・就職フェア」を開催しました。計19ブースで暮らし・仕事・住まいの個別相談が一度にできる機会



セミナーでは先輩移住者による貴重な体験談が語られました

とあり、和歌山県へのU-Jターン希望者が多数来場されました。県内各地から先輩移住者も7名参加し、個別相談ブースでは自身で撮影した四季折々の写真や地図等を活用しながら相談者をお迎えしました。さらに、セミナースペースでは先輩移住者による「ぶっちゃけトークセッション」を開催し、6名の移住者が登壇しました。トークセッション①では、移住までのステップや移住先での仕事等について素直な思いをお話していました。トークセッション②では、移住者でありながら、現在移住希望者をサポートするお仕事に就いている3名が登壇し、田舎暮らしを楽しむ秘訣や手厚いサポート体制について生の声を披露しました。また、移住後にカフェを起業した先輩移住者を囲んで座談会も行いました。カフェオリジナルのブレンドコー



賑やかな相談会の様子

ヒーと収穫量日本一を誇る梅を使った自家製パウンドケーキを味わいながら、非常に和やかな雰囲気の中で起業する魅力、地域への思いをお話しました。来場者には、いきいきと暮らす移住者の姿、またそれを支える自治体担当



熱心に話を聞く相談者さんの姿も

者の熱心な姿が伝わったのではないかと思います。和歌山県では、各市町村に移住前から移住後までを二元的に支援するワンストップパーソンを、受入地域には住民主体の移住者受入協議会を設置し、行政と住民が連携しながら移住者をお迎えしています。本誌でも定期的に取り上げられる全国唯一の移住体験研修施設「県ふるさと定住センター」では、現地見学の同行案内や農作業体験研修、移住後のサポート研修等を実施しています。ご希望のライフスタイルに合った移住先が見つかるよう、田舎暮らし応援県わかやまでサポートさせて頂きます！あなたもわかやま暮らしの仲間入りをお願いしますか？

第2回 山梨県 長野県 静岡県

3県合同移住相談会&セミナー



2015年11月15日(日)東京交通会館12階にて、第2回「山梨県・長野県・静岡県3県合同移住相談会&セミナー」が開催されました。

当日は昨年よりも多くの団体が参加し、山梨県13県ブース、長野県12ブース、静岡県15ブースを構えました。移住希望地域の上位に入る人気のエリアのため、多くのお客様にお越しいただくことができました。昨年に比べて小さなお子様を伴ったご家族も多く見られ、キッズスペースを利用しながら熱心に相談されていた姿が印象的でした。



セミナーでは先輩移住者の体験談が紹介されました

相談できる雰囲気づくりをした自治体も。先輩移住者も相談に対応し、移住者目線のアドバイスも行うなど地域の温かさが伝わったのではないかと思います。

午後は各県がセミナーを開催。地域情報・住宅情報を提供したり、先輩移住者とのトークセッションを行うなど、広い角度から地域の良さを発信していました。

東京からほど近い3県は、移住だけではなく2地域居住先としても注目されている場所です。今後も週末を中心に各地のセミナーを開催しております。是非ご来訪いただき、あなただけの田舎暮らしスタイルを見つけてください。



相談会の様子

長野県 新潟県

富山県 石川県

祝・北陸新幹線開業！
4県合同移住フェア



2015年10月25日(日)、東京交通会館12階で、「祝・北陸新幹線開業！長野・新潟・富山・石川4県合同移住フェア」が開催されました。

今年3月14日に開通したばかりの北陸新幹線につながった4県が集い、各県10ブースずつ計40ブースを出展して来場者を迎えました。

セミナー会場では、各県による出展団体PRと先輩移住者の体験談紹介を行いました。出展団体PRでは、行政担当者が各市町村の概要を紹介し、地域の雰囲気や自然の美しさ、交通の利便性、地元への定住支援策などを伝えました。先輩移住者の体験談では、各県一人計4人が移住の体験エピソードを



相談会の様子

紹介しました。いずれも若い移住者さんでしたが、移住までの経緯や現在の暮らし方は様々でした。来場者には、バリエーション豊かな地方移住の在り方が伝わったことと思います。

東京駅から北陸新幹線を使えば、4県の中で一番遠い石川県の金沢駅まで最速約2時間半とぐっと近くなりました。日帰りも十分可能です。定住先としても2地域居住先としても、4県を候補の一つとしてみてはいかがでしょうか。



セミナーでは各自治体が熱心に地元をPRしました

四季の暮らし

偶然の出会いから福島へ

福島県三島町在勤
小松今日子さん

偶然の出会いが重なり、福島県三島町の建設会社の社員として、モデルハウスを利用した食堂「つるのIORI」を運営しています。地元を大切に思う方々との出会いがなければできなかったことです。本当にありがたいと感じています。

幼稚園から高校までを福島県郡山市で過ごしました。横浜市の企業に就職し、調理師として社員食堂などの厨房に立っていました。ですが震災などを機に独立したいという思いが高まり、どこでやろうか調べていたところ、ふるさと回帰支援センターを知りました。店を出す場所のこだわりはなかったのですが、センターで偶然福島県担当の相談員さんに出会ったことがきっかけで「くくしま大交流フェア」に行き、その会場で三島町の「IORI倶楽部」に出会いました。



あったかい薪ストーブのある「つるのIORI」の室内



一目惚れした薪ストーブ

「IORI倶楽部」は、地元の木材の有効活用や定住、二地域居住の推進に取り組んでいる団体です。私は活動紹介写真の中で見つけた薪ストーブに一目惚れしたのです。「こんな薪ストーブがある店をやらねえな」と。その薪ストーブは「IORI倶楽部」を運営する建設会社が地元材を使って板倉工法で建てたモデルハウスに設置してあるということでした。私は薪ストーブ見たさに三島町に行き、建設会社の方にお会いしたところ、「モデルハウスで案内係をやりながらモデルハウスで店をやってはどうか」と誘っていただきました。正直、現地に需要はあるのか、雪は大丈夫なのかなど不安もありました。でも「やってみてダメだったら、また考えればいい」という言葉に背中を押され、思い切って2014年5月に会津若松市に引越し、三島町で働き始めました。

料理を通して地域に受け入れてもらう

モデルハウスの案内係の仕事の傍ら、お弁当のデリバリーや町内のIT企業さんに呼んでいただいてケータリングもしました。ありがたいことに「料理を作る人が来たらしい」という口コミも広がり、町内の女子会に呼ばれて料理を担当したり、地元で

滞在型アートプロジェクトが行われた際にモデルハウスで料理をお出しするなどして、地域の人と距離を縮めることもできました。店の準備では、食材調達方法を同業の方に聞いたりして手探り状態でした。都市部とは違ってお客さんのターゲットをしぼることが難しかったので、一日中同じものを同じ値段で提供すること、季節ごとに自分がおいしいと思うものを作るようにしています。身近な方から収穫した食材を分けてもらうこともあります。そんな時、食材を譲り合ったり分け合ったりする喜びを感じることができます。都会では経験できなかったことです。旬のものを旬の時期に食べるのができて、作り手としてとてもおもしろいのです。

「大事な人に教えたくなる店」へ

振り返ると、私が行動的だったわけではなく、すべて周りの方にアイデアをいただいたからやれてこられたなと感じます。モデルハウスを使わせてもらえましたし、近くに温泉施設がありますので人が立ち寄りやすい場所でもあります。本来なら自分でPRしなくてはならないところ、口コミが広がって新聞やテレビで紹介してもらい、それらを見た人がわざわざ遠くから来てく

だされたこともあります。今後は「つるのIORI」が人を三島町に呼び込む存在になればと思います。

三島町は冬の間、雪が常にあります。スタッドレスタイヤや暖房にもお金がかかります。除雪作業はしよっちゅうで手間がかかります。でもそれも生活の一部でおもしろいと感じています。夏の緑は美しく、秋にかけて刻々と葉の色が変わります。店の目の前に流れる只見川の流れるも美しく、天候によって川の色が変わるのです。ですが一番好きなのは冬の只見川です。一面が雪に覆われ、川筋は黒っぽく見えて水墨画の世界のようです。お客さんには只見川の流れるを何時間もゆっくり眺めて過ごしていただきたいです。

三島町の皆さんによくして頂いて「こまで来られたので、本当に感謝の一言です。今後、「つるのIORI」を地域の人にとって「大事な人に教えたくなる店」にできればと思っています。



私の一番好きな只見川の冬の景色

※2015夏号の「四季の暮らし 連載Vol.8」で間違いがありました。14ページ1段目の「結婚して主人の家を継ぐことになり」は「結婚して祖母の家に孫ターンをし」が正しい表現です。ここにお詫び申し上げます。

「小千谷市から那賀町、そして協力隊へ」
 (定住のためのナリワイおこし)
 (空き家改修の取り組み等)

徳島県那賀町在勤
 桑高仁志さん

はじめに

徳島県那賀町の地域おこし協力隊の桑高です。任期最終年度の3年目を迎え、現在空き家改修によるゲストハウス作り・地域内起業での定住を目指しています。群馬育ちの自分がなぜ今徳島にいるのか、この7年間の歩みについて書き綴りたいと思います。

中越地震での災害ボランティア、山間地集落との出会い

平成16年10月、新潟中越地震の災害ボランティアに通う中、小千谷市の山間地集落と出会い、山の営み・暮らしぶりに強く惹かれるようになりました。ムラに通い田植え・稲刈りを手伝うつもりが逆に教えられ、ムラの人たちと汗を流し呑み明かす中、次第に「山の知恵や豊かさを学びたい・都会



小千谷での首都圏大学生との交流事業



木沢のお山の運動会

の若者とムラを繋ぐ仕事をしたい」と思い始めていたところ、県の「復興支援員制度」が始まり同市復興支援員を4年間勤めることになりました。

新潟県小千谷市での復興支援員生活

2009年春、過疎高齢化が進む市南部のコミュニティ支援に携わる中、学生インターン受入・ばあちゃん卓球サークルや活性化団体立ち上げを行ないました。住民と手探りで歩んだ4年間は人生で一番豊かな時間だったと思います。しかし充実した日々を過ごす反面、プレイヤーとして集落最前線で活躍する地域おこし協力隊がどこか眩しく、意を決し復興支援員を辞し、新天地・徳島に飛び込むことになりました。

新潟から徳島へ、地域おこし協力隊奮闘記

知人の案内で神山町・上勝町を見て回る中、知人に「ばあちゃんたちと何かするのが桑高でしょ?」と言われ、自分も「知らない地域の方がワクワクする!!」と思い立ち、2013年春、那賀町木沢地区の地域おこし協力隊となり

ました。着任後呼ばれた地元の集まりは35年続いた保健ボランティア団体の解散式：会場全員が涙する中、担当保健師さんから「桑高あとは頼む!」と言わ



平均年齢73才の杉の娘楽校

れてしまつて。地元小学校も閉校直前、自分がやらなきゃ誰がやる!と奮い立ち、地元ばあちゃん25人の女子校「杉の娘楽校」を立ち上げました。セーラー服を身に纏い互いの特技を学ぶ交流サロンの他、夏には首都圏学生を転校生として受け入れ、学生交流や個人史聞き取りを行なっています。

協力隊3年目の現在は、東京の建築系学生との団体空き家改修プロジェクトと「建築実習による交流型ゲストハウス作り」に挑戦中です。おばあちゃんへの民泊・川遊び・地域のお祭り出演等：来る度木沢にハマっていく学生達と一緒に自分も楽しんでしまし、改修を忘れることもしばしば、最近ばあちゃんオープンに間に合うか内心ヒヤヒヤしてます笑。

那賀町への定住と起業、これからのナリワイづくり

新潟から始まった地域暮らし。なぜ自分はここまで地方に惹かれるのか、最近やつとその答えが見つかりました。たぶん独りで生きていけないからなのかなと。

住民と移住者が互いが必要とし支え合う新しい地方暮らしは都市部で味わえない豊かさです。素敵な住民達との出会い、木沢に通ってくる学生との交流。答えがない地域づくりの面白さ。僕は任期後も木沢に残ることにしました。

現在「杉の娘楽校×建築学生×空き家活用」の取り組みを継続していく法人の立ち上げ準備中で、将来的には「体験交流型のゲストハウス運営・空き家バンク・人材育成」を軸とした事業展開を考えています。ビジネスとして成り立つかは未知数、でも高齢化率58%・人口500人の木沢だからこそ挑戦するなら今の想いが日増しに強くなっています。それでも焦らず、じっくり仲間を集めながらこれからも木沢の皆さんとさやかな喜びを分かち合いながら楽しくやっていきたいと思っています。



空き家改修プロジェクトの学生達

活躍する移住相談員さん



“岡山”のこと？
それなら、私に任せて！

岡山県、
おもしろいですよ！
色んな人知って
もらいたい。

「移住決定しました」
この報告が
何より嬉しい！

おかやま晴れの国ぐらしJUアドバイザー

佐藤 ひろみ

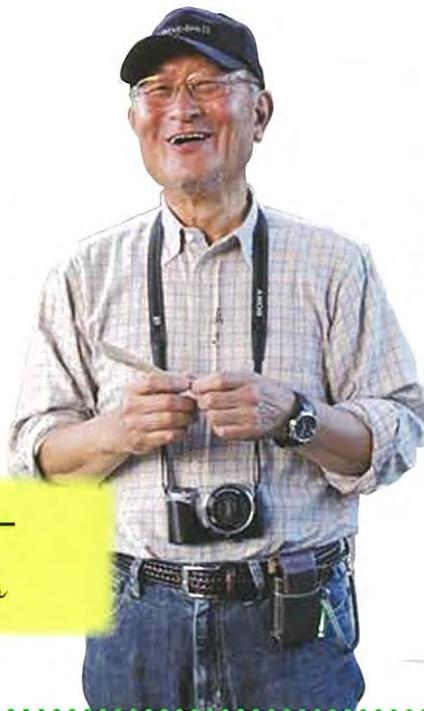
毎週
火～土曜
10:00～18:00

岡山県の田舎暮らし相談は…

おかやま晴れの国ぐらしJUアドバイザーまで

☎090-6344-1965 ✉okayama@osaka-furusato.com

Uターンして、
改めて“若桜”は
いいと思った。



若桜町移住アドバイザー

鈴木 正明さん

鳥取県若桜町で活躍する移住相談員の鈴木さん。
若桜町で青春時代を過ごし、それからは大阪の堺市
に住んでおられ、Uターンで若桜町にカムバック。
約40ぐらいある集落を把握し、地域の人からも頼ら
れ引っ張りだこの日々。

鳥取県
若桜町の
田舎暮らし
相談窓口

若桜町役場 ふるさと創生課まで

☎0858-82-2231 ✉furusato@town.wakasa.tottori.jp

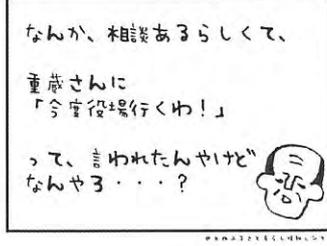
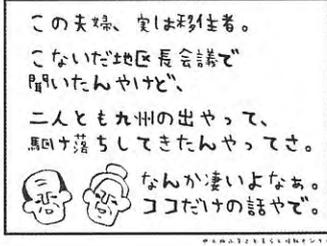
現地で活躍する移住相談員さん

大阪生まれで大阪育ち。岡山県へは旅行で行くぐらいでした。

岡山相談員になろうと思ったのは、オリーブ園からの瀬戸内海が忘れられなくて、相談員の募集を見つけて、これだ！と思い応募したのがきっかけです。



古川村ものがたり
「嫁は強し。旦那は…」
の巻き。



高梁市へ移住が決まった樋口さんご家族と記念撮影。今年の2月に相談に来られ、あれから半年。

この日は、明日が引越しだというのに、立ち寄ってくれたんです。

最初にセンターに来られた当時は赤ちゃんだったお子さんがもう歩いてるし！

…しみじみ！

高梁市の愉快な方たち(?!)と田舎暮らしを楽しんで下さいね♪



今号のニュース



大阪へ用事で帰ってくるついでに大阪府四條畷市から宮崎県高原町へ移住された『中原 正人さん』がセンターにも帰ってきてくれました♪

昨年の春に移住報告してくれて、半年ごとに現状報告しにフラッと立ち寄ってくれます。

中原さんは、霧島連峰が見える高原町へ移住し、現在は農業に従事するための準備中。

引越しの挨拶しに近所回ったら、お祝いに近所の方が次々に一升瓶のお酒を持ってきてくれて一時家の一室が酒屋になったとか。

九州らしいですね。

中原さん、最近はビニールハウスも組み立て始めて、何を栽培しようか考え中とのこと。

移住された方が移住先で楽しく暮らしている報告を聞くのが一番嬉しいですよ。

また、近況報告しに帰ってきてくれるのが待ち遠しいですよ♪



しまねU・Iターンフェア2015 in 東京 が開催されました

2015年11月1日(日)、「しまねU・Iターンフェア2015in東京」が開催されました。東京交通会館の12階全面(合計600坪!)を使用し、島根県人150人以上が集合。全市町村が参加したこの大イベントについて、公益財団法人ふるさと島根定住財団の担当者、イベント当日、会場インタビューしました!



会場入口付近の様子

Q① ずばり、今回の来場者目標は?

去年の同イベントが550名程度だったので、それを上回る人数を目指しています。

Q② 今回の特色・工夫点を教えてください!

官民総力戦ですね。市町村ブースはもちろんですが、「支援機関ブース」コーナーとして、農林漁業・建設業・IT関連業・医療業等の仕事の相談ブース、住居や家計の相談ブースを設けました。

加えて、「しまね留学合同説明会」エリアも設置し、11校の相談ブースや島根県教育魅力化特命官である岩本悠さんのプレゼンを用意しました。これまでより多くの点を相談してもらえる環境になったと思います。

また先輩移住者も去年より増員しています。今回20名以上に参加してもらっていますが、起業等の働き方をしている方だけでなく、当財団の職業紹介を利用し、転職して移住された方にも来てもらいました。移住をもっと身近に感じてもらうための工夫です。



セミナーの様子

Q③ 集客はどんな方法を取っていますか?

2年前から、このイベントの時だけ特別なお便りを送っています。送り先は、これまでのイベントに来られた方や求職登録の方。普段のダイレクトメールとは違い、茶封筒を使用して、宛名も手書きで。手書きのお手紙も添えてお送りしています。1000名以上へ送付するので、正直手間はかかりますが、まずはダイレクトメールを開封してもらうためにこの取り組みを始めました。アンケートの結果、このお便りを含め、財団からの案内を見て来てくださった方が一番多かったので、継続して行っています。

またその他のアプローチとしては、新聞広告等の利用とあわせて、各市町村や参加する先輩移住者等のFacebook等の発信があります。個人のネットワークの影響力もとても大きいと感じています。



活気ある相談ブース

Q④ このような大イベント開催までの道のりは長かったのではないのでしょうか…?

平成22年から県の施策として、各市町村に定住支援員を配置しました。この支援員の存在が市町村の意識アップにつながったと感じています。このU・Iターンフェアは平成22年から年に1回開催していますが、昨年度はじめて全市町村がそろい、サポート体制がより強化されました。今後も市町村をはじめ、各分野で活躍されている方々との連携を強化し、移住を検討されている方々をサポートしていこうと思っています。

まだまだ聞き足りませんが、今回はここまで。先進県島根の取り組み、ぜひ参考にしてみてください!



しまねSuper大使吉田君

※2015秋号の「そうだ、地方で暮らそう!」国民会議inふるさと回帰フェア パネルディスカッションで間違いがありました。受田浩之氏の肩書き「高知大学 副学長」は「高知大学 副学長」の誤りでした。ここにお詫び申し上げます。

会 員 募 集

のお知らせ

ふるさと回帰運動には、 みなさんのご支援が必要です

こんな形でふるさと回帰運動に参加できます



自治体 団体は

団体正会員
(年会費 50,000円)

- ふるさと暮らし情報センター（東京と大阪）を利用して…
 - 田舎暮らしセミナー等を開催することができます！
 - 体験ツアーなどのイベント情報等のチラシを優先的に設置し、センターで、告知・募集のお手伝いをします！
 - 地域情報を常設し、来訪者に配布・ご案内することができます！
- ふるさと回帰支援センターのホームページを利用して…
 - 地域のイベントや体験ツアー等の情報掲載や告知ができます！
 - 「お役立ちサイト集」にリンクを貼ることができます！
- ふるさと回帰フェアで…
 - 相談コーナー、物産コーナー、不動産物件コーナー等へ優先的に出展できます！

個人は

個人正会員
(年会費 5,000円)

- 情報誌「100万人のふるさと」を年4回送付いたします。
- IJU ターン、二地域居住、都市と農山漁村の交流など、ご自身のライフスタイルに合ったふるさと暮らしのために、個別の相談を受けられます。
- ふるさと回帰支援センター主催のイベントに優先的に参加できます。
- 田舎暮らしセミナーや地域のイベント情報等を掲載したメールマガジンを、定期的にお送りします。(希望者のみ)

賛助 (サポート) 会員として

- 個人 1口 3,000円
(個人賛助会員)
- 団体 1口 30,000円
(団体賛助会員)
- 企業 1口 100,000円
(企業賛助会員)

■情報誌「100万人のふるさと」を年4回送付いたします。
※賛助会員も税額控除が受けられます

寄付のご協力も受付中です

認定NPO法人への寄付がしやすくなりました！

税額控除が受けられます。
(寄付金額 -2,000円) × 40% ※個人の場合

- ・1万円の寄付で3,200円の減税
- ・10万円の寄付で39,200円の減税

お申込み・お問合せ

参加ご希望の方は、申込書に必要事項をご記入のうえ FAX または郵送にてお申込みください。
ホームページからお申し込み可能です。

100万人のふるさと回帰・循環運動推進・支援センター事務局

【東京】〒100-0006
東京都千代田区有楽町2-10-1
東京交通会館5F・6F
TEL 03-6273-4401 FAX 03-6273-4404
E-mail info@furusatokaiki.net
http://www.furusatokaiki.net/

【大阪】〒540-0029
大阪府大阪市中央区本町橋2-31
シティプラザ大阪内1階
TEL 06-4790-3000 FAX 06-4790-3111
E-mail info@osaka-furusato.com
http://www.osaka-furusato.com/

理事長……………見城美枝子（青森大学教授・エッセイスト）
顧問……………奥野長衛（JA 全中会長）
神津里季生（連合会長）
榊原定征（日本経団連会長）
嶋津 昭（地域総合整備財団顧問）
山田俊男（元全中専務理事）
理事……………加藤登紀子（歌手）
参加各団体代表
代表理事……………高橋 公
事務局長……………大森正久

高橋 公

編集後記
認定NPO法人ふるさと回帰支援センター代表理事

今年も残すところあとわずかになった。振り返るに、センターの13年間の地道な取り組みがやっと花開いた1年になったような気がする。最近、よく先見の明がありましたねと言われることが多いが、そういったものがあつたとは思わない。ただ、諦めずに一生懸命に取り組んできた結果だと思っている。来年は7月に交通会館内でまた引越しを行う。それによって、北海道から沖縄までの移住相談が二元的に行える体制が構築される。その計画が成功するまで、休むわけにはいかない。今年末までに、各県の移住相談員配置が29県となった。12月に徳島県・神奈川県が相談員を配置した。来年7月には、さらに10県全後の県の相談員配置が行われる見通しだ。しかし、相談員を配置したからといってそれで終わるわけではない。それは始まりにすぎないのだ。結果が求められるのである。約40県前後の県を糾合し、創生本部の言う年間6万人の移住者の達成をめざすことは至難の業である。責任の重さをひしひしと感じさせられている。

ただ、希望を抱かせることもある。それは各自治体が開催する移住セミナーが活性化していることだ。今年1年間で300回のセミナーを開催した。その内容も多様なものになってきている。女性限定セミナーあり、県横断セミナーあり、複数県の合同セミナーあり、二地域居住セミナーありと枚挙にいとまがない。これが参加者を増やしている。来年はどんなテーマのセミナーが開催されるのか、いまから楽しみである。知恵を出し、想いを込めてセミナー企画を行えば、自ずと道は切り開かれると言っているだろう。いま、ふるさと回帰運動が面白い！

来年の目標は、相談件数月3000件に置きたいと思っている。今年4月以降月2000件という実績から言えば決して無理な数字ではない。なんとか達成し、日本の明日を築く礎になりたいと思っている。

2016年が皆様にとって希望あふれる1年となるよう心から祈念します。

100万人のふるさと 2015年 冬

2015年12月21日発行

発行人：高橋 公

発行所：認定NPO法人ふるさと回帰支援センター

〒100-0006 東京都千代田区有楽町2-10-1 東京交通会館5F・6F 認定NPO法人ふるさと回帰支援センター事務局

Tel: 03-6273-4401 Fax: 03-6273-4404 e-mail: info@furusatokaiki.net URL http://www.furusatokaiki.net/

編集協力・デザイン：ウェイツ

2015年冬

発行人／高橋公

発行所

認定NPO法人ふるさと回帰支援センター

〒100-0006 東京都千代田区有楽町 2・10・1 東京交通会館 5・6階 TEL 03・6273・4401 FAX 03・6273・4404



宝くじは、 みなさまの 豊かな暮らしに 役立っています。

宝くじは、図書館や動物園、学校や公園の整備をはじめ、少子高齢化対策や災害に強い街づくりまで、さまざまなかたちで、みなさまの暮らしに役立っています。



一般財団法人 日本宝くじ協会は、宝くじに関する調査研究や公益法人等が行う社会に貢献する事業への助成を行っています。



一般財団法人

日本宝くじ協会

ホームページ

<http://jla-takarakuji.or.jp/>

